

# ふるさとを語る

兵庫県は、5つの国で成り立っており、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、様々な分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。

今回は、女性の落語家として落語芸術協会で初の真打ちになられた落語家の桂右團治さんに、榎本県人会事務局長がお話を伺いました。

## 桂 右團治

(かつら うだんじ)



神戸市垂水区出身

昭和61年 10代目桂文治に入門。小文となる。

昭和62年 早稲田大学法学部を卒業

平成3年 ニツ目に昇進

平成12年 落語芸術協会初女性真打ちに昇進。右團治となる。

右團治さんは神戸のご出身ですが、なぜ東京で落語家になられたのか、不思議に思えます。どのようないきさつなのでしょうか。

神戸にいた時は、漫才は好きで聴いていたのですが、落語はあまり聴かずに育ちました。大学進学で東京に来てから、ラジオの「昭和の名人特集」をたまに録音したのです。それを何度も聴いているうちに、15分という短い時間の中で、人生のドラマが描き出されることに感動しました。

末廣亭などの寄席に行くと、演じ手によって違った話に聞こえたり、同じ演じ手でも客や場の雰囲気によって違って聞こえたり。同じ話でも生きています。すまね。そのあたりに魅力を感じて。でも、普通、それで落語家になろうと思いませんよね(笑)。

そうですね(笑)。感動はしても職業としての落語家は選択しないでしょうね。大学在学中に入門されましたが、就職活動はしなかったのですか。

司法試験の勉強はしていたのですが、他の就職活動はしていません。法学部ですが、方角を変えたということ(笑)。

10代目桂文治師匠に入門されました。前の桂伸治師匠ですね。

「お笑いタッグマッチ」やNHKの「お好み演芸会」にも出演していました。裏表がなく、生きていくだけで芸みたい、そんな気がしたんですね。直感で。会ってみたらそのとおりの方で、楽屋で言っていたことをそのまま高座でしゃべって、それでうけていました。明治、大正時代からタイムスリップしてきたようで、実生活でも普段から着物を着ていました。

当時は、女性の落語家はいらっしやなかったのではないですか？師匠はすんなり認めてくれましたか？

うちの落語芸術協会には女性はいなかったです。ずっと廻ればいましたが、当時は寿退社でした。落語協会の方には二人おり、前座でした。先駆者が入って来ていた頃だと思えます。

師匠からは、「大変だぞ」と言われました。「弟子も、面倒をみる師匠も大変だ」と。女の弟子がいるということに厳しい目がきたりします。

ご両親は、理解してくれましたか？

事後報告だったので、びっくりしていました。入門を認めてくれる段階になって、師匠が「一生の問題だから親が来なきゃだめだ」と。とにかく東京に挨拶に来てもらいましたが、それから何年間は口をきいてもらえませんでした。当時の関西では落語家はとても堅気じゃないという印象がありました。春団治師匠の「芸のためなら女房も泣かす」という歌がはやった頃です。

漫オブームがありましたね。

あの頃ですね。今は、関西にも繁昌亭という落語中心の寄席が復活しましたが、当時は一般の人が落語を聞く機会が少なかったです。落語の席がずつといくつかがあつた東京と落語に対する感覚が違っていかもしれません。

ご両親にはいつ認めてもらえたのですか？

4年ほど師匠の家から寄席に通い、前座で修行をして、その後ニツ目になります。独り立ちになる時なので、親がお礼の挨拶に来てくれました。その時、たまたま国立演芸場で出番があり、その舞台を観てから、両親は少しずつ応援してくれるようになりました。

落語と言うと、熊さん八つあんの世界で、男の視点でしゃべりますよね。いざしゃべるとなじみにくいという違和感はなかったですか？

落語は原稿があるのではなく、口伝です。師匠が演じたとおり、最初はマネするしかないですね。登場人物は男性が多いですから、演じ分けが難しいと思いました。ご隠居さん、熊さん八つあん、番頭さん、いろいろ似たよう

な年でも、違う人物が出てきます。その演じ分けが難しい。それは今でもそうです。

**真打ちになると教えてくれる師匠はいないので自分が師匠ですね。お客さんの反応を見て、演じ方を変えたりされるのですか。**

例えば、「ここはおとなく言ったけれども、次は押してみたらどうだろうか」、「今日はこんなところであけたから、こつちを強調してみよう」とか、お客さんの反応を聴きながら、その日の反省をするわけです。

**演じる途中で「ちよっと変えてみようか」ということもあるんですか。**

あります、あります。いいお客さんだと乗せられるっていうのもありますね。普段思いつかないことがふっと浮かんで、それが受けたりすることもありますね。だからお客様も責任を負っているんですよね（笑）。ライブって本当にそうですよね。

**共演というが、共作というが、演じる者と聴く者が一つの作品を作っているという……。**

だから、同じ話をやってもそのたびに違っていてという、おもしろみが出てくるんだと思います。

**落語家になった醍醐味は、お客さんと交感しながら演じるということですか。**

そうですね。上手く働いてプラスにいった時も醍醐味がありますし、反対に、いつものとおりやっているだけけど、どんだん雰囲気沈んでいつて空回りしてしまう時があるんですね。そういう時は高座にいる間も終わってからも辛いです。どこが悪かったのかと落ち込んで、反省して。それで自分なりに考えたことをやってみて、それが受けた時は醍醐味ですね。その繰り返しなんだと思います。

**江戸落語の一番の魅力は何でしょうが。**

江戸落語の半数以上は上方から来ています。ほぼ同じ時期に生まれたのですが、上方が少し早いんですね。上方の落語は路上で生まれて、道行く人に聴かせた辻斬なんです。だから大きな声、大きなジェスチャーで、着物も派手です。江戸に入ってきた時は座敷斬でした。あまり派手ではなく

粋を重んじるようになった。それが江戸落語の特徴だし魅力です。武士と町人の身分を越えた心の交流もそうです。

**粋の良さが江戸の文化だとしたら、関西の良さは何でしょうが。**

同じ「粋」と書いても、上方では「あの目さん、粋（すい）やなあ」と言いますが、突き詰めると同じかも知れません。上方は町人文化だから二人寄れば漫才になると言いますよね。そういうのが上方落語にもあると思います。

**最近落語を演じるだけでなく、「文七元結（ぶんしちもつとじ）」を芝居にしてプロデュースされています。落語の世界を広げているという発想なのですか。**

そうですね。落語を立体化する、いろんな人が演じる芝居なら、落語を初めて聴かれるお年寄りやお子さんでも理解しやすいんじゃないかと思ってやりました。

**娘役をされていますね。**

ええ、始めて女形。女形っていうのも変ですけど（笑）。

**芝居のほかにも、英語落語や講演会、江戸弁の講師など、幅広く活動をされています。**

いろんなご縁で広がったのです。江戸弁の指導は、江戸弁にうるさい10代目桂文治の弟子だったことで、映画の撮影現場に行ったり、テレビやラジオの脚本のチェックを何かしました。

英語落語は、子どもに英語を教える英語学校から依頼があり挑戦しました。学生時代から英語は好きで勉強しています。今度の日曜日にTOEICの試験を受けるんです（笑）。

**（笑）初めてですか？**

初めてです。日本以外にも落語を聴いていただける場を広げられたらいいなと思っていて。そういうことにも頭が働くようになりましたね。

**神戸、関西なまりで、ご苦労されましたか。**

江戸弁は落語を通じて覚えていく感じですね。星陵高校の時に放送部だったんです。NHK主催のアナウンス部門

で県大会にも行きました。その頃から標準語の勉強はしていました。ただ、やっぱり江戸弁は独特なので細かいところは難しいです。ハンデはありますが、その分江戸の古典を守るという意識を持っていますので細かく注意しています。

**女性としてご苦労された反面、逆に女性でよかったということはありますか。お客さんから見て癒しというか和むというか。**

それはあるかも知れません。女性にも、しゃきしゃきした粋な江戸のお姉さんいますが、私はゆるキャラと言われているので。今、女性の落語家は20人近くまで増えてきました。これからはそれぞれの個性で生きていく時代になつていくと思います。

**右團治さんのホームページには「演芸をもっと身近に」とあります。**

ミニ寄席やお蕎麦屋さんの土階、デイサービスにも行っています。先日、小学校に行きましたら、幼稚園の子も一緒にいました。落語は無理だろと思うていたのですが、わかるんですね。体で噺をうけとめて、体で表現するので。立派な一人の人格だと実感しました。落語を聴く人口も年齢も広がっています。

**子どもたちが聴いてくれるのは嬉しいですね。最後に、首都圏でふるさとを同じくする方、若い人たちにメッセージをお願いします。**

ふるさとで思い出したのですが、実は高校時代に学校寄席で落語を観ているのです。松鶴師匠の一門が来てくれました。今思うとたいへん豪華な番組でした。ばかうけですね。もしかするとそれが落語家を志す根つこになったのかもかもしれません。

東京はいろいろな刺激が多い。ふるさとでの経験を生かし、考えて行動してほしい。若い方には是非寄席に来ていただきたい。今までの悩みがばつと真つ白になつて（笑）、ちよつとした心の栄養剤になると思います。しつかりとふるさとを胸にがんばってください。私もしつかりがんばります。

**今日はありがとうございました。**

（平成24年11月16日 国立演芸場にて）